

よりワイヤ梯子で5 m降りると急勾配をもつ洞床に着く。泥や腐敗した枝葉。今にも崩れ落ちそうな岩の群。恐る恐る15 m下ると堅穴部分の入口に着く。今回は偵察がてらの試降だったので正確な測量は行なっていないが、この洞口は直径10 m×8 mはあろうか。この附近より天井を仰ぎ見ると、あたかも2本の石橋が虹の如く宙に浮いている。それと共に3つの空間より差込む陽光がこのホールを幻想の世界に導びいている。1つの岩角に梯子をセッティングし、垂直に約10 m下降すると畳8枚程の大テラスに着く。洞壁は、先程のホールとは打って変って白くすべすべしている。この緩い傾斜のテラスよりもさらに垂直に20 m下降すると第2テラスに着く。地上より延べ50 mの地点である。洞内はトンネルを立てたような格好である。このテラスより強力ライトで下方を照らすと約80℃の傾斜でさらに50 m程続いており、底には雪溪が横たわっている。壁は白くて美しいがぎっしりと浮石を抱いている。ちなみに石を投げると、それが壁にぶち当り、洞内に反響する号音と共に落石が落石を呼び地底の闇に消えて行く。今回は偵察であり、人員も装備も不足しているのでこのテラスよりは下降していないが、この銀鳳洞もおそらく青海千里洞級の基模を有する堅穴洞窟と思われる。

—— 銀 路 洞 ——

角 野 二 郎

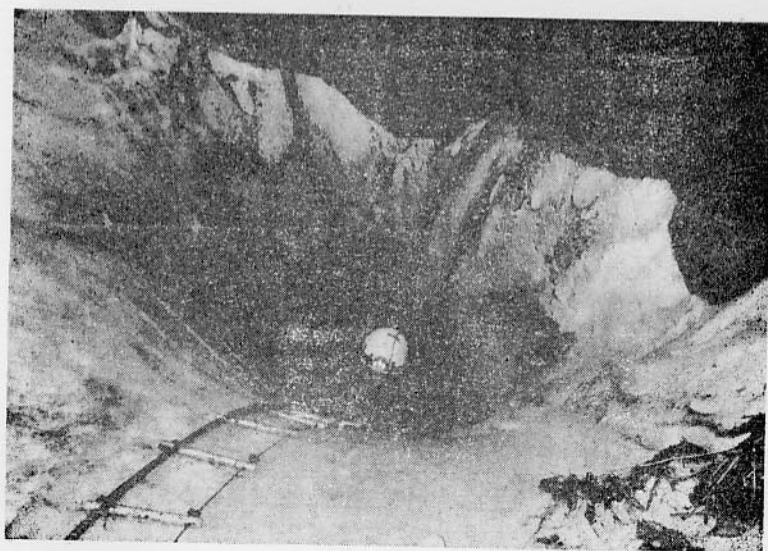
不屈の洞窟と言われて来た青海千里洞も、第五次調査の時には、その計画段階に於いても、もう時間の問題であるという感が強かった。つまり、我々の目的は最早青海千里洞解明ではなく、マイコミ平一帯の総合調査によるより高度なケイビングの遂行にある。事実、第五次調査の最大の目的は、青海千里洞解明に附随して、マイコミ平に散在する多数のドリーネや吸込み（沢水が洞窟の中へ流れ込んでいる所）と麓の福来口との関連性を調査する事であったのである。その対象として、以前から注目していた銀路鉢と新マイコミが挙げられた。幸い青海千里洞調査が予定通りに済み、5日間の予備日がこれらの洞窟調査にあてられた。

8月11日、この日は休養日であったが、散歩がてらに、ワイヤ梯子のフィックス地点等を偵察する為、銀路鉢へ向かった。航空写真によると、銀路鉢は青海千里洞の北東側、尾根一つ越えたあたりに有り、直径は100～120 mもあろうか。

この日我々は軽い気持で地図も持たずに行った為、ルートが判からなくなり、ブッシュの中を

2時間程も捜し回るはめになった。その途中で新洞を発見したが、この洞窟は、大きなホール天井が3箇所大きく倒壊し、残った部分がアーチの様に見える。石を落とすといつまでも音が消えない。相当深い堅穴らしい。この洞窟は後に我々によって銀鳳洞と名付けられたが、今後「幻の大横穴」解明に大きな糸口を持っているものと期待できよう。この日は新洞の事でもちきりで、銀路鉢の方はおジャンになってしまった。

翌12日、調査隊は銀路鉢と新洞とに分けられたが、銀路洞といえば我々を失望させる事ばかりであった。背にキスリングを負い、両手に梯子を持って急斜面のブッシュを漕ぎ、やっと思いでドリーネの縁に立つ。慎重を期してアブザイレンで降りる。底は一面雪が詰まっていて、四方の壁はほとんど垂直に40m程も切り立っている。まるでローマのコロセウムの様だ。ここでライオンでも放たれたら一貫の終りだ。さて、問題の洞窟はドリーネの南端に残雪が直径1m程ぽっくり穴のあいた所がその入口らしい。梯子のジッヘルワイヤをフィックスする岩を捜すのに苦勞したが、とにかく雪の穴に梯子を40m垂らして降りてみると、なんと15mでアウト。がっかりしながら他の入口を捜すと、このドリーネの南側から東側にかけて残雪と壁との間に出来た隙間が見つかった。山岳用語ではこの隙間のことをシュルンドと言うが、そこにあったのはシュルンドの息子みたいなやつだ。このシュルンドを東側の端からチムニークライムで降りると、たちまち底に着いてしまい、壁にそって南側に回ると沼状になっていて、雪解水がここでしみ込んでいる。見上げると、先程降りた雪の穴がぽっかり口を開いている。結局銀路鉢はドリーネ



だけで、そこより堅穴が続いているという我々の推定は見事に裏切られた。ドリーネの北側の壁の中程の所に高さ2m、幅0.5m程の横穴があいている。この横穴はドリーネの壁をぶち抜いて向こう側の山腹に通じている事が去年の偵察の時に判っていたので、帰りはこの横穴をくぐり抜けることにした。しかし、こ

の横穴の内部は狭く、傾斜も急で、その上岩が非常にもろく、両手に梯子、背にキスリングの我々は大変恐しい思いをせねばならなかった。とにかく最後まで面白くない銀路鉦調査行であった。

9. マイコミ平洞窟と観光

岩 本 琢 磨

過去五回、我々は毎年青海千里洞へと足を向けている。そのたびごとに、このマイコミ平は絶えず新しい自然を見せてくれる。沢治いの柳の淑かさ、クルミの木の漂々軽さ、それが所々の地底からの凍った冷気で足許を震わせている。これが秋であると葉も落ち一層寒々と感じられる。沢自体も生々としている。何故なら、毎年川筋が変わり秋ともなると水と競走を強いられる。これは石灰岩地帯だけに観られる現象で、流れは川の底へ潜ってしまうのである。又、豪雨の後は新洞の誕生となる。第1次活動の際には、台風通過後の朝炊事場としていた所に新洞が口をみせた。実際このマイコミ平は生きている。泣かされる時もあるがしかし自然と対話でき、これほど強烈な返事をしてくれる相手もないだろう。地の底でもそれがいえる。洞の中には雪溪のカーベットがある。ときには虎皮に、又ある時は馬のそれにと形を変え、地下水はしずくのごとく、嵐のごとく洞内に降りそそぎ、その響きは地上以上に反響する。その境の洞口では四季によって移り変わる高山植物。そんなに高地ではないが洞内から吹き上げる冷気により特殊地帯を作り、美しく簡素な花を咲かせている。私はそれらの一つ一つの名は知らないが紫の花、黄の花と自然の愛苦しい一面に触れることができる。毎年帰る時、他人の見えていない自然に触れたことに満足感を味わうが、又それを子供の様にいいふらしたい気持。反面、自分だけで見尽したい気持。しかし、これは贅沢である。

もしマイコミ平一帯を観光開発するには、困難な悪条件がひかえている。まず第一に場所がめぐまれていないことである。最初にこの地だけを目的に観光客を呼び込むには完全に企業化しなければ宣伝も中途半端にならざるをえない。近くでは有名な観光地は親不知、黒姫川だけだし、それに便乗するとしてもそれは決定的なものではないだけに、独自に観光化を押し進めなければならぬのではないかと。近くに大都市がないし名も売りにくいだろう。次に時期が初夏から初秋の間と限られ、他の季節は雪と寒さに遮られる。それからアブの大群である。たとえ景色がいかに美しくともこれでは興ざめである。幸いにもこれは退治することができると聞き安心した。